

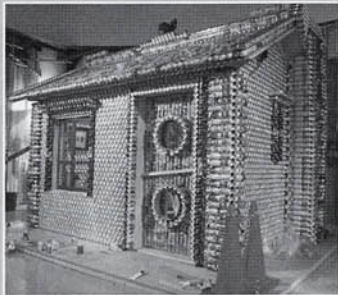
空き缶ハウス

特別展「きのうよりワクワクしてきた。」 出展作品／増岡興 作 幅／415cm 奥行／315cm 高さ／360cm

佐藤 浩司

文化資源研究センター

この空き缶ハウスをつくるのにもちいたアルミ缶の総数はおよそ一万八〇〇〇個におよぶ。たったひとりの男が、三カ月以上をついやして廃品のなかからこれらのアルミ缶をあつめ、それ以上の日数をかけて建設した。空き缶を組みあわせた柱と梁からなる立派なラーメン構造をもち、軒先や窓枠などのディテールに



はもつと別のところにある。男は線路沿いのビニールテントでくらしている。いわゆる路上生活をはじめて二年になる。最初に空き缶ハウスの建設をおもいたったのは、いまの生活をはじめてから半年後。アルミ缶は男の身の回りに無尽蔵にあった。路上生活者の多くは生活の糧をアルミ缶の回収によって得ていたからだ。男にはもつ

はそれぞれ別種の空き缶をもちいる徹底ぶりだ。

アルミ缶は中身の商品を容れるためにあり、中身を消費してしまえばゴミとして捨てられる運命にある。その空き缶がゴミにならずに巨大な量塊となって自身の存在を主張する。それはたしかに驚嘆すべきことにはちがいないが、空き缶ハウスの衝撃

もと建設業にかかわっていた経験があり、ありあまるアルミ缶から家づくりを思いたつのに大それた野心は必要なかった。問題はその先だ。毎朝四時半に起きる生活のかたわら、傷んでいない缶をあつめ、つなぎあわせるという単調な仕事を何カ月にもわたって継続する。それは信念とか、思想といった言葉

が似つかわしい事件にみえる。空き缶ハウスをつくる可能性は誰にでもひらかれている。しかし、いまだかつて、それをあえて実現した者は彼をおいてなかったのだ。そのようなとき、われわれは男の夢の実現をすなおに祝福する言葉をもてるだろうか？（写真は特別展のために制作された二代目である）